

藤原辰史客員研究員Web講演会 「コロナ新時代の食と農の思想」

日時：令和2年10月20日（火）14：15～16：15

政策研究調査官 藤田 義紀

農林水産政策研究所では、新たで複雑な問題に対応するため、多様な分野の第一線で活躍されている外部の専門家を客員研究員としてお迎えしています。

この度、農業史、食と農の思想、ドイツ現代史等を研究分野とされ、精力的に執筆活動を行っておられる京都大学人文科学研究所准教授の藤原辰史氏を講師に迎え、「コロナ新時代の食と農の思想」と題して御講演いただきましたので、概要を紹介します。

1. ゆるぎない根幹としての食と農の思想

経済成長を国是とするような世の中で、東日本大震災の時のように、いつ経済活動が止められるか分からない時代に、経済成長が一度の人生をかける思想になり得るのかを問いたいと思います。

また、日本の国益を守るために日本の農業や食を考える時代はもう終わりに近づいてきていて、日本で実施されているモデルがポストコロナの時代の食と農の思想の具現化たり得るかが試されているのではないのでしょうか。

思想を持つこと、根幹に据えるゆるぎない、考える軸のようなものを持つこと、それがないとこの時代を乗り越えられません。

日本はユーラシア大陸東端の島の連なりで、山があって、スピードの速い川が流れていて、平野が少ない。こうした特徴を最大限生かした農業を思想の根幹に据え、それを世界農業のこうした地域のモデルの一つとして示していくことが、私たちに試されていると思います。

2. 新型コロナウイルスの「抜き打ちテスト」

フランス哲学を専門とする鶴飼哲さんによれば、新型コロナウイルスは、「今、あなたたちが生きている仕組みは本当に人間にとって生きやすい社会を作るシステムだったか」という抜き打ちテストです。このテストに多くの国が引っかかり、日本も弱点をさらしました。このテストが露わにしたものは、①大規模森林破壊によるウイルス媒介動物の生息空間の破壊、②非正規雇用形態の脆弱さ、③言葉の破壊、④人文学と文化の軽視、⑤男性中心社会、⑥都市一極集中の脆弱さです。

これらのことを一言で表すキーワードは、「新自由主義」です。

3. 新自由主義の限界

最近、多くの人文学者が注目している時代が1970～80年代です。世界の経済構造が変わっていく中で、人間のあ

り方も大きく変わってきました。ウェンディ・ブラウンは著書『いかにして民主主義は失われていくのか 新自由主義の見えざる攻撃』で、政治的な人間を経済的人間に誘導し、人間を人的資本という教育が進められてきたと指摘しています。また、国家が経済を放任する自由主義ではなく、経済が国家と国民を統治していくような時代だとも言っています。

農業は、経済が統治不可能な天候や自然の力が組み込まれていて、新自由主義と摩擦が生じやすい存在です。ある程度の土地の集積は否めないかもしれませんが、大き過ぎるものを求めたり、再編されていったりすることでは、農業が持つ「ケア力」が弱くなってしまうと思います。新自由主義に乗らない農業のあり方とはどういうものでしょうか。

4. 新自由主義による農業破壊

イラク戦争で空爆により国の種子貯蔵庫が破壊されたイラクでは、大企業が救いの手をさしのべて、遺伝子組換えの種子を無料で配布しました。この時にできた法律で種子の再利用を禁止した結果、この種子を買い続けなければならなくなりました。その企業の農薬もセットで売られ、イラク人が食べないパスタ用小麦が導入されてしまう状況になりました。

ブラウンによれば、あらゆる状況を考えて最適に現状を解決できるという経済モデル的な思考が働くと、必然的に、その時に最も資金、物を持っている団体がその場所を統治すると、最もスムーズに進行できるという解が出てきます。当事者とそれを受け取る側の意図とは関係なくその解が出、それに従う状況が新自由主義で、誰もコントロールできないことが、そのユニークなところだと言っています。

ナオミ・クラインは著書『ショック・ドクトリン』で、アジェンデ政権がCIAにより弾圧された後、天安門事件の後などに、常にアメリカ式の新自由主義的な経済システムが導入されていくと指摘しています。それを惨事便乗型資本主義といい、農業や食も含まれています。

5. 先駆者から学ぶ

江戸時代の農学者安藤昌益は、農業を政策、思想課題として考えることは必然的に人間の内臓、そして自然の問題を考えることと直結すると言っています。彼のキーワードは「直耕」です。文字どおり土を耕すだけでなく、内臓を耕すことも表していて、土と内臓はつながっていると言っています。

また、アメリカの地質学者モントゴメリーと生物学者ビクレ夫妻も、植物の根が養分を土中にばらまいて、微生物を活性化させ根圏を形成し豊かな土壌を作ることと、人間が内臓で養分を与え多くの微生物を働かせていることを挙げて、土と内臓は微生物モデルで考えると同じだと指摘しています。

生ごみは微生物によって分解されるとガスを発生し、飼料にもなります。化石燃料を脱して地球温暖化に影響を与えない循環型の農業へと、計画的に切り進んでいくべきだと考えます。

6. 思想

コロナ新時代、どのような思想があり得るか、三つに分けて考察します。

(1) 植物の思想

マンクワズは著書『植物は知性をもっている』で、植物の根は先端のセンサーが働いて土中を掘り進んでいくが、それは私たちのネットワークの作り方と似て、根同士の間で様々な情報の交換が水分と栄養素の効果的な吸収に結びついていると言っています。私は「根っこワーク」と呼んでいます。非中央集権型の分散が今後の人間社会、植物世界をつなげる思想として重要で、経済合理主義を乗り越えていく大きな思想になるのではないのでしょうか。

(2) 分解の思想

農業ほど死んだ生き物を新しい生物の構成要素に変えるのに役立つ産業はないのに、この分解という部分をアピールできていません。あらゆるものから属性を洗いとって、別の属性の要素へ変えられるようにする現象に、人間はできる限り静かに参加していくことで、微生物の力が活性化されて、エネルギーも生み出します。人間だけでなく植物や動物、土壌の活性化にもつながるものを、なぜ化学薬品で潰さざるを得ないか考え直す時代に来ています。

(3) 縁食の思想

新自由主義はいつも「家族を大事に」と道徳家のふりをするとされています。新自由主義で傷ついた人を、家族で復活させてほしいと望むからです。しかし、ケア労働や家族の食事などを女性に任せ続けてきた社会を変えるためには、食の領域をもっと家族以外の人たちと緩やかにつなげていかなければなりません。公衆食堂はその一つです。

ベーシックインカムを進めるという話がありますが、加えてベーシックサービスとして食べ物や住宅、医療などサービスが行き届かない限り、いくらお金があっても豊かな社会は訪れないと考えています。

孤食でも共食でもなく、ふらっと立ち寄ってふらっと帰れるような食堂のあり方を、私は「縁食」と名付けていますが、世界的に、とりわけ貧困地帯で人々を救う居場所作りになっています。今後も居場所作りに食べ物が使われていくと思っています。

7. 生態自治の思想

三つの思想を考察し、コロナ新時代のキーワードを一言で言われると、「自治」を真っ先に挙げます。

新自由主義の下で、水や種子や食など共有物の過剰な市場化・商品化が進み、シェアするという思想が弱くなってきましたが、一方で、アウトソーシングでなくインソーシングしていく自治の運動が、世界各地に広がっています。これをミュニシパリズムと呼んでいます。キーワードは「外に頼むな」です。

バルセロナ・イン・コモンという宣言がなされて、「経済を回すために生きているのか」となってきたのを、「この場所で生きていくことが楽しい」ということに回帰する動きが出てきています。岸本聡子さんの著書『水道、再び公営化!』に記されていますが、権力を植物のように分散して、自治体に任せ、更に小さな食を通じたコミュニティに任せていく、自治の力を信じようという時代が来始めているのではないのでしょうか。自治を側面から支える政府が、おそらくコロナ新時代の大きなキーワードになります。その自治も、生物がそれぞれ活発に動ける場所作りをしていく「生態自治」、生態的なジャンルと社会的な人間社会が一緒くたになる自治が求められているということが、思想的な課題です。それは全部をインソーシングしろということではなく、学問と科学と知識は公平なグローバリズムに基づいて交流されなければなりません。公平なグローバリズムが、誰かの我慢や破壊、しわ寄せによって成り立っていないかを地球規模で見る思想が、求められているはずで

自然の自治の力を信じてやってみましょうという自治の連合体がこの日本列島を覆っていくような試みが少しずつ出てきて変わっていけば、これは間違いなく歴史に残る画期的事件だと思います。そこに農業や農業に関わる皆さんの果たす役割はとて



藤原辰史客員研究員

くあとがき>

本講演会の動画及び資料は、当研究所ホームページでご覧いただけます。

<https://www.maff.go.jp/primaff/koho/seminar/2020/index.html>

なお、講演会当日は、Zoomでの視聴ができない事態が発生し、参加者の皆様には大変御迷惑をおかけしました。この場をお借りして改めてお詫び申し上げます。この経験を活かし、当研究所では今後もWebでの発信を続けていきたいと考えておりますので、よろしくお願いいたし